

(生活ノートから) 抜粋

| | 学校 → 家庭 | 家庭 → 学校 |
|-------------|---|--|
| 3/2年 (男) | 布しい 乾まで でし出 のたが た言葉 しん言 でうの 「天の 気ハ」 い室ミ い教室 はを「 日擦 合摩 たまし | そい ね。あ うりう よなど しぶう で喜ら 「寒一 い緒で 「時つ んつを ぶいち たうづ でし |
| 3/4年 (女) | 直別動 (て)り てく揺 しなを 涙情か にで感 会てに るし達 送対友 をじる 生れる 卒業前 (卒の 接れか まじ | 心じ ものれ 子ども 子、き です。下 ででし りした。 通解し の理ま そくい くよ思 全をく |
| 3/9年 (男) | 背でい やのて 肩くれ のたさ 達注意 も注 どんに 子ま達 のハも 周子 らハの か他 朝中、 まし | ぶちあ た持つ は気こ のつる くいこ たの情 たつと とほし ン遊す チ「ま バいて を思み 達とて 友んた |

中学部の実践・研究の反省と今後の課題

本校中学部では創設以来、「生活の中で生きて働く力を身につけた子」を育てることを目標に、その指導を行ってきた。そして、本年度は「からだづくり」を通して、「いきいきと行動する子」を目指した研究を進めてきた。短期間のわずかな実践ではあるが、その中で、次のような進歩がみられた。

1. 共同研究に取り組んだため、研究テーマに対しての教官の意志統一が図れた。
2. 科学的認識に立った実態把握の必要性に気づいた。
3. 性、生活リズム、食生活などの問題について、学部懇談を持つ中で、保護者と同一の課題を持って話し合うことができた。それによって、家庭との連携が深まってきた。
4. 体力づくりを考えていく中で、発達段階に応じた指導のあり方を検討するようになった。
5. 教官が、性教育の必要性を感じ、共通課題として取り組んだ。
6. 生活ノートを一日のリズムや家庭での様子を記入できるように改善したため、一人ひとりの実態がより把握でき、学校での指導に生かすことができた。

しかし、まだまだ問題点も多く残されている。まず、「生活リズムの確立」・「食生活の改善」などの問題である。長年の子育ての中で培われた習慣の改善は、短期間に行えるものではなかった。今後も根強い繰り返しの指導を必要とする。また、一人ひとりに個人目標を設定し、教官の個人研究も行ってきたが、4つの柱を中心にした共同研究の形態も取ったため、その分、「個に応じた指導」がおろそかになってきているのではないかと不安の念を持っている。また、朝の活動の体力づくりについての日々の話し合いが十分に持てなく、きめ細かに個に応じた、介助や指導ができなかったということ。性に関する指導では、授業実践の積み上げが足らなかったこと、そして一人ひとりの変容についての話し合いの場が多く持てなかったということである。

そこで、来年度以降、次のような課題を待って、研究と取り組むことにした。

1. 家庭との連携の一層の充実
2. 一人ひとりの、「からだ」に関する、より科学的な実態把握。
3. 体力づくりの見直し（一人ひとりの発達に応じたものへ）
4. 保護者と教官が共通認識に立った性に関する指導の充実
5. 個に応じたコミュニケーションの確立
6. 評価に対する工夫

以上、中学部の実践・研究の経過を述べ、提言してきたが、幾多の問題を今後に残すことになった。私たちの研究活動は、まだやっと著に着いたばかりである。今後も、この子どもたちから学びとり、保護者と手をとり合い、私たちの考える「生きて働く力の育成」を目指し、いきいきと行動する中学部生徒の育成に努力したいと考える。

VI 中学部の個人研究

以上、中学部が取り組んだ共同研究の考え方と構想について、その概要を述べたつもりである。

私たちの研究活動は、4月～7月に構想をまとめ、調査研究とテスト等による実態把握、生活リズムの確立（特に食生活の改善）を中心にした保護者との共通理解などを平行して行ってきた。従って、各教官が、それぞれの課題を明確にして、仮説を設定し、検証と取り組んだのは9月に入ってからである。各教官の研究の取り組みは、やっとその著に着いたばかりである。

私たちは、この度の研究発表を通して、研究の構想・実態把握や検証のための調査研究の内容・個人研究の取り組み過程等についてまとめ、中学部の研究活動を、よりよい方向に軌道修正し、今後数年間にわたり続くであろうと思われる研究の基礎を確立しようと考えている。

個人研究では、前島教官が、情緒障害で多動なH・N児を1対1の指導の中で、ようやく落ち着かせた経過を取り上げている。白水教官は、知能の遅れが重大な自閉児T・O児の友だちとのかかわり方に目をむけて取り組んでいる。田中教官は、肥満傾向の強いK・M児の食生活と体づくりについて、家庭との連携の中で問題の改善と取り組んでいる。

岸田教官は、強度の自閉児H・M児の食生活の改善から肥満対策と取り組みながら、H・M児とのコミュニケーションの確立をめざして取り組んでいる。石脇教官は、筋力が弱いため脊柱側湾の傾向があるK・N児の運動機能訓練と言語の指導を家庭との連携を強化して取り組んでいる。

八木教官は、リズム（歌・ダンス）の得意なダウン症児K・T₂児に、指導Ⅲの体力づくりと作業学習を通して、持続力や忍耐力の育てる過程を、市谷教官は、知能の遅れの重大なS・Y児の食事と運動からの肥満対策、一緒に行動する中で、コミュニケーションの確立を、家庭と協力して取り組んでいる現状を、それぞれ報告している。以下その概要を述べる。